

ムラサキ栽培プロジェクトについて

- ・校歌ゆかりのムラサキ（寺門克・06G）

雑草という名の草はない。こう言ったのは昭和天皇だとか。

野生の草の名は、知らない人が多い。名を知られた草は、名で呼ばれる。有名な草だ。あまり知られない草が、大雑把に雑草といわれる。無名の草だ。

一もと咲ける野の花の ゆかりの色を翳す時

これはわが校歌の一節である。この野の花に名はないのか。否。

この野の花の名は古くから知られている。「むらさき」「紫草」である。「ゆかりの色」は紫色の別名になっている。根を乾かして赤紫色の染料として使われていたからだ。校歌の歌詞は古今集にある一首からきている。

紫のひともとゆえに武蔵野の 花はみながらあはれとぞ見る

「むらさき」は有名だった。多くの和歌に詠まれていた。万葉集にはよく知られた相聞歌がある。

あかねさす紫野行き標野行き 野守は見ずや君が袖振る 額田王

紫草のにはほへる妹を憎くあらば 人妻ゆゑにわれ恋ひめやも 天武天皇

紫草を栽培していた紫野（京都市北区）は朝廷御料の禁野だったから野守（番人）がいた。その目を盗んでの逢瀬だ。

また、古今集や伊勢物語にも収められている在原業平の歌は、先にあげた「紫のひともとゆえに…」を本歌とするらしい。

むらさきの色こきときはめもはるに 野なる草木ぞわかれざりけり

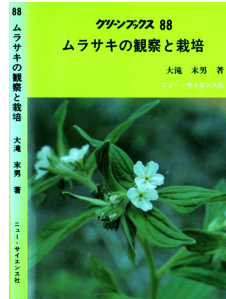
これを読むと「紫のひともとゆえに…」が単なる叙景歌でないことがわかる。すなわち、紫のおかげで他の草々にも深い感興を抱くのと同じように、愛するあなたの存在で、あなたに縁がある人はみな愛しいといった恋の歌になる。

かつては、それほど有名だった紫草も、いまや絶滅に瀕している。

花としては、白く、小さい。淋し気である。京では禁野で育てていたのだろうが、武蔵

野では自生していたにちがいない。紫草は貴重な草だったようだ。

- ・ムラサキの観察と栽培（ニュー・サイエンス社）



大滝末男先生（五中15B）の著書。

大滝先生は母校で生物を教え、ムラサキの栽培をされておりました。詳しくは次の資料をご参照ください。

- ・青木保之（06A）様より頂戴した手紙（2005年7月13日）

私は昭和60年頃旧建設省の関東地方建設局というところにおいて、ムラサキの復活活動を始めました。当時建設省の広報誌に書いた稿と全国紙各紙が取り上げてくれた中から一つの記事をコピーしてご参考までにお届けします。

ムラサキ栽培は現在確立した方法は無いと思います。大滝先生が書かれた本（「ムラサキの観察と栽培」ニュー・サイエンス社—栽培については伊賀孝一郎氏の手法ですが）と、「染色と生活」染色と生活社1975という雑誌でムラサキ特集をした際のものが教科書的になっています。文部省の伝統文化保存のためムラサキ栽培を農家に依頼したことがあったようですがあまり良い成果は得られなかったようです（直接調べたわけではありません、伝聞です）。

伊賀孝一郎（達紀）氏は高校の数学の先生であったとのことですが、西洋ムラサキを使ったムラサキ復活運動に腹を立て自分でご出身の菅平のムラサキを採取、文献を調べ、実験を繰り返し、ご自分の栽培法を作り出しました。宮中にも株を献上し、侍従を通じて（昭和天皇から）ご下問もあったと聞きました。

伊賀方式は、1年目は肥料を少なくして根をしっかり作り2年目に開花させるのが基本です。肥料が多いと根腐れする恐れがあるからです。また根腐れ防止で雨が当たらぬ工夫が要ります。私はビニールで覆いをしています。鉢でしたら軒の下などに置きます。要は水遣りの管理です。

伊賀先生は大滝先生に紹介頂いたのですが、大滝先生については当時小石川で生物の先生をしておられた八重樫先輩（私は生物研究会にいましたので先生とご一緒はしませんでした）が令名は聞いていましたので）に手紙でご相談したところ、学校に紫草園を作った大

滝先生と相談しなさいといってくださいなのです。大滝先生は富士山で自生地を見つけられ、建設省の武蔵丘陵森林公園を中心とした研究班を引率して頂いて7月初めに観察しました。確か昭和60年です。場所は明言できませんが、ススキ原で西日の当たらない場所に自生していましたが、群落は出来ていませんでした。若干の土壌の下は溶岩ですから、排水は極めてよいが、地上周辺はススキなどが群生し、空中湿度は高い場所です。

建設省は当初、昭和記念公園で栽培を考えましたが、設備を考え武蔵丘陵森林公園でプロジェクトとして今日まで継続して栽培をしています。この間、富士の自生地で種子を採取し、伊賀先生の種子と富士の種子が基本です。

私はその後、種々のついでで福島県の猪苗代及び川俣の種子を入手、一部、武蔵に行ったかもしれません。しかし種子は頂けても、自生地は絶対教えてくれません。盗掘もあるので用心するのと染色家の方が自分の染色用に秘密にしていることもあるのです。

私は1990年大阪で開催された花の万博協会に出向、総合運営本部長と言う仕事をしましたが、この万博に武蔵丘陵森林公園からムラサキの株 300 株を出展、人気になり、大分報道されました。このときの公園側の担当は林さんという 035 の方だったのですが、名簿を見ると藤吉さんと姓が変わって退職されているようです。

自生地や伊賀先生の経験、私の経験からして、用土は排水がよければあまりこだわりは無いと思いますが、赤玉を中心に鹿沼や化成用土などで十分です。肥料は腐葉土などを用い、春先置き肥、薄めた液肥位にした方が無難です。肥料が多いと一度に苗がやられることもあります。

日当りは午前中日が当たれば十分です。西日や暑い日は寒冷紗などで調整した方がよいと思います。確立した栽培法は無いのが現実で、武蔵でも記録をとりながら種々試験しています。

種子は自生のものは発芽率が低く、発芽させることが大変ですが、いま使っている種子はかなり東京で栽培してきていますので、馴化しています。70%程度はいくと思います。

播種の時期は春の彼岸前、2月中旬までには終えておきたいです。東京は大分温暖化していますので、ムラサキにとっての環境は良いとは言えません。もともとアムール地方から南下してきたと考えられているので、寒い地方の植物です。

私は自宅で20年くらい栽培を続けておりますが、鉢と地植えで 200 株程度はあります。以前、生物の岩田先生が生物研究会の生徒を連れて見にこられたこともあります。家では大体5月初めから咲き始め今でも少し咲いています。

学校できちんと栽培されるとしたら、中途半端でなくちゃんと学校事業として位置づけきめ細かに対応していかないとそのときだけの線香花火になる可能性があります。大滝先生はご自分が紫草園を作られた経験から、学校が栽培をしないのを大変不満に思っておられ、私にも大分不服を漏らしておられました。私は片手間ではうまくいかないし、学校が体制をとれぬようなら無理ですと諫めていました。特に紫根をとり染色まで視野にいれ、経年的に続けるとすると、夏場の管理を含めアブラムシ対策、消毒などの作業も行程に入れねばなりません。

栽培場所は西日のあたる場所は絶対に避けてください。またやる以上は1000粒以上の播

種をしてください。結局は試行錯誤で自分たちにあった栽培手法を作り出していかなければなりません。そのような過程を通じて、生徒たちの植物への知識、愛情が深まると思います。ムラサキ栽培が出来れば、たいていの野草の栽培はできるようになると思います。

私の家は日当たりが悪いのでどうしても茎が細くしっかりした体形になりにくいのですが、昨年、島根県のある町で私の種子を使って栽培しているところを視察しましたが、ビニール屋根の下でしっかりした株に仕上がっていました。場所と管理がよければしっかりしたよい株になると思います。栽培サイクルを確立すること。こまめに面倒をみることです。

・天藤製薬株式会社よりの種子（林 知行・023D）

天藤（あまとう）製薬株式会社（京都府福知山市）は痔疾治療剤ボラギノール®製造元です。

小石川のようにムラサキを校章にデザインしている学校は多く、その様な学校をまわってムラサキ純粋和種の栽培を呼びかけて来られました。小石川にも毎年の様に株と種子を持参されました。

ムラサキの花は創立当初からずっと母校の校章にデザインされています。

		
府立五中	都立小石川高校	都立小石川中等教育学校

その当時、天藤製薬の方が持参された資料です。



当初は紫友同窓会事務局が対応しておりましたが、その重要性に気づき、同窓会の部会として活動を再開した「紫友さろん」として栽培メンバーを募り、栽培を続けております。

毎年、天藤製薬株式会社の農場から種子を送って頂き、現在で30名以上（学校を含む）のメンバーが栽培、その栽培法などの情報を交換しています。

純粋和種の種子ということで京都大学においてDNA鑑定済みの種子であるとの説明を受けております。

先の青木保之様よりの手紙にあるとおり、栽培メンバーそれぞれに工夫をして毎年取り組んでおりますから、メンバーそれぞれに栽培法はあると思いますが、東向きの場所、排水のよい場所、深く根がはるところから深い鉢なり地面の方がよいらしいことが分かってきました。

種子が完熟すると（白くなります）かえって発芽しづらくなるので、種子がついたら早めに採取する方が良いでしょう。